

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：片山 和之（かたやま かずゆき）
- (2) 年 齢：61 歳
- (3) 参加事業：第 8 回「東南アジア青年の船」事業（1981 年）
- (4) 職 業：外交官（ペルー駐劔特命全権大使）



■ 応募のきっかけ

私は、高校卒業まで広島県の田舎で育ってきました。半世紀前の小学生時代、私にとっての外国は即ち米国や欧州であり、憧れと興味の対象はもっぱら欧米社会でありました。英語やフランス語を話す人を単純に格好良いと思っていました。

当時の田舎では、日常生活で外国人と出会う機会はなく、中学校・高校で習った英語を実践する機会も全くありませんでした。大学に入学後、英語を何とか活用してみたいと強く思い、知り合いになったアメリカ人から毎週英会話を教わるようになりました。様々な話題を拙い英語で議論する内に、国際関係や異文化コミュニケーションに強い興味を持ち始めました。ちょうどその頃は、「ジャパン・アズ・ナンバー・ワン」と言われ、世界から日本への関心も高まり始めた時期でした。

自分の欲求を満足させる手っ取り早い手段は、留学や長期旅行で海外に雄飛することでした。当時、個人旅行指南書である「地球の歩き方」が創刊され、海外旅行を楽しむ大学生も増え始めた頃ではあったものの、私自身は貧乏学生でしたので海外に行くことはまだまだ夢でした。

ある日、下宿の大家さんから、外交官になった学生が昔ここに住んでいたという話を伺いました。彼は在学中に青年交流事業に参加したと言います。調べてみたところ、当時の総理府（現内閣府）青少年対策本部が毎年秋に実施していた、「東南アジア青年の船」事業（以下「東ア船」という。）でした。

1974 年に田中角栄総理（当時）が東南アジアを歴訪した際、タイやインドネシアで反日抗議デモの洗礼を受けるとも、事業開始の際、関係者の念頭にあったと仄聞しました。日本は戦前の軍事力に代わって今度は経済力で東南アジアを再び勢力下に置こうとしていると一部の批判に晒されたことへの反省から、対東南アジア政策再考の一環としてこの青年交流事業が位置付けられた側面があったと言います。

以下、当時の記憶を辿ってスキームを紹介すると、各国ナショナル・リーダーに率いられた日本と東南アジアの参加青年各国 35 名が、管理官以下担当の総理府職員（管理部）と共に、チャーターした商船三井「につぼん丸」に乗船し、船上で共同生活と各種公式行事を行います。そして、各寄港地でホーム・ステイを含む現地政府・民間関係者との交流を実施し、心と心の触れあいを通じて日本と東南アジア青年間の相互理解を促進する約 1 か月半のプログラムでした。

身近な海外でありながら関心の薄かった東南アジアを知る上で絶好の機会であること、そして、とにかかくにも海外旅行がまだ学生にとって高嶺の花であった時代に参加費用が少額であった当時のこの事業に強く惹き付けられ、翌年挑戦することを決めました。春から夏に行われた各都道府県レベルの一次選考及び全国レベルの最終選考を無事突破し、晴れて第 8 回「東南アジア青年の船」事業の日本参加青年の一人に選ばれました。そして、代々木にあるオリンピック記念青少年総合センターでの日本参加青年を対象とした事前研修を経て、大学 3 年生であった 1981 年 9 月下旬から 11 月にかけての約 1 か月半、集結地マニラを皮切りに ASEAN5 か国（現在は 10 か国に拡大しましたが、当時、フィリピン、インドネシア、シンガポール、マレーシア、タイの 5 か国で構成）を巡り、初めての海外訪問を実現し、アジア各国青年と寝食を共にして一緒に行事を成功させ、**率直な思いを語り合うとても貴重な体験**をすることができました。

最初は、英語を話すことに自信がなく、人前でのプレゼンテーション、異なった風俗習慣や宗教、文化、食事に戸惑う

こともありました。船上で「同じ釜の飯を食う」各国の仲間とは共に行事を進めていく中で打ち解け、連帯感が醸成されました。南十字星が輝く夜空を眺めながらの船上での語らいは、センチメンタルな感情にも影響され、異文化コミュニケーションの面白さを私に教えてくれました。海外に身を置いて、外国人を相手に日本の事象や政策を分かりやすく的確に説明する必要性に迫られ、自分がいかに日本のことに無知であるかを知り、日本というものを改めて主体的に認識させられる毎日でした。同時に、**日本という存在を異文化の中で相対化・客観化して眺める視座も学びました。**

この学びは、その後の人生においてどのような場面でいかされましたか。

過去の日本とアジア諸国との関わりの歴史、現在の政治・経済関係、将来のあるべき方向性等につき現実感覚と当事者意識を持って彼等と意見交換をする重要性を認識しました。日本は孤立した島国であり、様々な形でアジア、そして世界とつながっていく必要があること、そしてそのつながりを通じてしか自らの平和と繁栄を実現することができないということ、彼等との交流の中で深く考えられました。

■ 人間関係構築の訓練

他人を説得し共感を得るためには、「理」と「情」が共に重要と考えますが、東ア船での1か月半の生活は、今から振り返ると、各国青年との共同生活を通じてこの二つの能力を養う絶好の環境でした。

最近でこそ、大型クルーズ船は珍しくありませんが、当時日本船籍で世界のどの海洋も航海できる大型船は、この「にっぽん丸」1隻のみであったと記憶しています。1万トン級の堂々たる客船でした。現在は、その2倍以上の規模の2代目「にっぽん丸」が就航して久しいです。また、当時の貧乏学生にとって、船上での三度の食事はbuffetであっても夢のようでした。船上や寄港地で実施されるパーティーやレセプションも学生の分際ではどきまぎすることもありましたが、社交を通じたコミュニケーションと人間関係の構築という面で良い訓練になりました。

参加青年やナショナル・リーダーは多種多彩で、タイ参加青年からは**後の外務大臣**も誕生しました。管理部職員ともその後、外務省に入省して最近に至るまで業務や私生活でお世話になりました。世界各地で仲間と再会して旧交を温めたり、最近ではフェイスブックで気軽に近況報告や情報交換をしたりと、**当時のネットワークは40年経った今も続いて**います。

「後の外務大臣」とはどなたですか。

Noppadol Patthama さんです。参加当時は20歳の学生で、その後弁護士になり、2007年～2008年、タクシン政権のもとで外務大臣を務められました。

外交上、当時のネットワークが役立った事例がありますか。

マレーシアやアメリカに赴任したときは、現地にいる人たちと連絡を取り合いました。ベルギーでは、日本参加青年34名中3名が偶然ブリュッセルに住んでいたため集まったこともありました。マレーシアに赴任した際には、マレーシア人の参加青年と再会し、彼は仲間意識から親身になって私にいろいろアドバイスしてくれました。日本とマレーシアの関係やマレーシアとの付き合い方について教えてくれました。私が大使館にいて、マレーシア外務省のカウンターパートと仕事でやり取りするのはまた違った次元の本音ベースでのアドバイスだったり、マレーシア社会の実情についての説明だったりしました。このような情報は、その国をより多元的に見るためのコミュニケーション・チャンネルとしていかされてきました。船の上で一定期間一緒に生活し、忘れがたい思い出を共有した友人だからこそ、提供してもらえた情報だったと思います。

■ 事業参加経験がその後のキャリアに与えた影響

東ア船事業を経験し、大学 3 年も終わろうとする中、卒業後の自分の進路を決めるにあたって、常に念頭にあったのは、この時の東南アジア各地訪問であり、各国青年との交流でした。政府部門でも、民間企業でも、とにかく国際分野の仕事に従事したいという強い思いから辿り着いた一つの結論が外交官という職業でした。

大学 4 年時に幸運にも外交官試験（外務公務員試験。現在は国家公務員試験に統合）に合格し、1983 年外務省に入省しました。東ア船への参加といい、外務省への就職といい、図らずも下宿にいたかつての先輩と同じコースを辿ることとなりました。ちなみに、その先輩（田良原政隆氏）は、外務省を退官後、シャンソン歌手になるという華麗なる変身を遂げています。

私の話に戻れば、爾来 40 年近くに亘る期間、外交に携わってきました。この間、留学を含め海外では中国 5 回、米国 3 回、欧州、東南アジアに 1 回ずつ、そして、現在は処女地ペルーに勤務しています。

■ 事業参加によって得られた成果

私にとって**東ア船への参加によって得た成果**を改めて整理すると、次の諸点が挙げられます。第 1 に、**英語プレゼン能力の向上**に有益だったこと。第 2 に、**東南アジアの歴史と現状を学び日本とのあるべき関係を考える**端緒となったこと。第 3 に、**祖国日本を外から見つめ直す貴重な機会**を得たこと、そして、第 4 に、その後の**人生に続く人脈を構築**できたこと、です。

「東南アジア青年の船」事業だからこそ得られた知見はありますか。

当時の参加国は、フィリピン、インドネシア、マレーシア、シンガポール、タイの 5 か国で、民族的には、マレー系、中国系、いろいろな人がいました。また、植民地としてスペイン、イギリス、オランダなどの影響を受けた国もあれば、独立を保った国もありました。宗教も仏教、イスラム教、キリスト教、土着の信仰などがあり、さらに経済的な発展の度合いも異なっていて、シンガポールのような国もあれば、これから発展しようとしている国もありました。文化も様々でした。「東南アジア」として、ひとくりにしている地域がこれほどまでに多様なかと驚き、その多様性を再認識しました。

■ 外交に携わるのは生身の人

外交は国益を巡る国家と国家の関係です。他方で、外交に携わっているのは生身の人間であり、究極的には様々なケミストリー（性格）を持った個々の外交官どうしの間関係の側面もあります。「国際関係論」が国際社会の客観的な原理や法則を明らかにしようとする「科学」（サイエンス）とするならば、「外交」は**政治と同様、様々な可能性を生み出す人間味溢れる「芸術」（アート）**です。

このような外交の要諦を考える時、東ア船に若い時代に参加できたことは幸運でした。**異文化交流を通じて日本の国益や国際社会における日本のあり方を考える**という自分のその後の職業人生に決定的な影響を与えたからです。外務省生活では、異境の地で種々の困難や苦勞を重ねましたが、それをはるかに上回るすばらしい出会いや得がたい経験をすることができました。今振り返ると、その契機となった学生時代の原体験が、「東南アジア青年の船」事業であったと、しみじみ感謝しています。



第 8 回「東南アジア青年の船」事業の仲間たちと 40 年ぶりに再会（2019 年）

船を用いた国際交流の強み・意義とは何でしょうか。

少し切り口が異なるかもしれませんが、戦前の日本は軍事力でもって世界の一等国になろうとしました。その反省に基づいて、戦後は経済力で一等国になろうとしました。その中でいろいろな摩擦が起こり、エコノミック・アニマルなどと言われることもありました。バブル以降は、その経済力にもかげりが出てきて、何を武器にして国際社会の中で地位を築いていくか、熟考しなければなりません。もちろん、経済力も大切ですし、一定の防衛力も必要ですが、今度は文化面での力が必要だと考えられるようになりました。つまり、ソフトパワーです。「日本は信用できる、日本のシステムは安心できる、日本の青年海外協力隊は地元の人と一緒に地道に活動してくれる、さすが日本だ」と思ってもらえるような、無形の力です。このソフトパワーこそが今後の日本にとって非常に大事なのです。ですから、「東南アジア青年の船」事業はより重要性を増していると思います。

私のような年代の者は昔よく、「雁行」のたとえ話を聞きました。雁が隊列を組んで飛んでいきます。その先頭にいるのが日本で、後ろにアジア諸国の国々が続いて日本の後を追っているというたとえ話です。しかし、今や一人当たりの GDP で計算すると、日本よりもシンガポールや香港のほうがはるかに大きくなっていて、決して日本がダントツで他国を率いているわけではありません。最近の AI や ITC の話になると、シンガポールや中国の方が先を行っている分野も少なくありません。様々な議論がありますが、大学のランキングでは、シンガポール、香港、中国の大学のほうが日本を上回っている状況です。こうした指標を見ると、アジア各国が日本をアジアのリーダーと見なしてくれることを大前提にできる時代は過ぎ去ったと言わざるをえません。ですから、日本がアジア各国の人たちに対して、日本は必要な国であり、日本の意見を聞くべきであり、日本のリーダーシップが大切だと思わせるような努力をこれまで以上に続けなければなら、日本の存在感が相対的に希薄になっていくに違いありません。だからこそ、「東南アジア青年の船」事業のようなプログラムが大事なのだと思います。

東南アジア青年の船事業の改善点、課題は何だと思いますか。

当時の参加国は 5 か国で、全て海に面した国でしたので、全部の国を回っていました。今は 10 か国で、ラオスのような内陸国も含まれています。ですから、昔のように小回りがきくような形で各地を訪問することは難しいでしょうし、参加国の数が倍になっていますので、参加人数も増えていると思います。プログラムの作り方も以前とは違って、良い意味でも悪い意味でも Bureaucratic（官僚的）になってきて、行事等を整理してプログラム運営をしなければならなくなっているはず。この予算厳しき折に、この事業をどのように継続させていくかという議論にも表れている通り、短期的に具体的な成果をもってこのプログラムの存在意義を示さなければいけない状況です。国民の税金を使っているわけですから、当然の議論ではあるかと思いますが、しかし、そのような発想そのものが、過去 30 年間にわたって、我が国の国力を低下させてきたのではないかと感じています。

未来の参加青年へ一言お願いします。

ぜひ、このプログラムにチャレンジしてください。東南アジアに行こうと考える場合、一番気楽なのは個人旅行ですが、この事業でしか味わえない様々な経験があります。大型客船に乗って長期の海外の旅ができること、各国の青年と共に乗船して互いに協力しながらディスカッションができるのもこのプログラムの魅力です。東南アジア 10 か国と付き合えるのもこの事業ならではの良さですし、ホーム・ステイで一般の人と触れ合ったり、現地で政府要人との会見の機会があったりもします。**英語を使ったコミュニケーション力を向上させ、東南アジアを知り、人脈を作り、日本を外から見るというすばらしい機会**があります。ぜひ、若いうちにチャレンジしてください。

片山和之氏プロフィール

1982 年外務公務員上級職試験合格、1983 年京都大学法学部を卒業し、外務省入省。香港中文大学、北京語言学院（現北京語言大学）、北京大学、スタンフォード大学に留学し、1987 年ハーバード大学大学院修士号取得（MA 地域研究）、2011 年マラヤ大学大学院博士号取得（Ph.D 国際関係論）。外務省アジア局中国課首席事務官、内閣官房副長官（事務）秘書官、大使館一等書記官（中国）、参事官（米国）、国際エネルギー課長、文化交流課長、大使館次席公使（マレーシア）、経済公使（中国）、次席公使（ベルギー）、デトロイト総領事、上海総領事、外務省研修所長（大使）を経て、2020 年ペルー駐劔特命全権大使。著書に、「ワシントンから眺めた中国」（東京図書出版 2003）、「China's Rise and Japan's Malaysia Policy」（University of Malaya Press 2012）、「対中外交の蹉跎 上海と日本人外交官」（日本僑報社 2017）、「歴史秘話 外務省研修所 知られざる歩みと実態」（光文社 2020）。日本国際政治学会会員。